



カルチュラル・スタディーズの理論家、スチュアート・ホール（1932–2014年）。ジャマイカのキングストンで生まれ、1951年にイギリスに渡り、オクスフォード大学で近代英米文学を学ぶ。パーミンガム大学現代文化研究センターを拠点にメディアや現代文化の批判的研究に貢献した。批評家としては1980年代に「サッチャリズム」という用語を作り出し、イギリスにおけるサッチャー保守党政権のネオリベラリズムや「権威主義的ポピュリズム」に対する批判の論陣を張り、反人種差別をめぐる社会運動や黒人アーティストの表現活動にも多大な影響を与えた。若い頃は『ニュー・レフト・レビュー』の編集長を務め、中学校の教員をしながら生活。のちに大学やオープン・ユニヴァーシティで教えるようになってからも、アカデミズムの外へ積極的に出て、テレビやラジオ出演などを通じ幅広い読者・聴衆に向けて発言をおこなった。

序章 真実を語れ、そのまっつき複雑性において

1. 「浮遊する記号表現」^{（1）}としての人種

一九六〇年代前半、ヘルベルト・マルクーゼのもとで学びながら『ニュー・レフト・レビュー』誌を愛読していたフェミニスト活動家アンジェラ・デイヴィスは、その編集長スチュアート・ホールがジャマイカ生まれの黒人であるとは思いもしなかったという。自分よりも一回り年上のホールがどのような「アイデンティティ」の人間かについては、関心を持つことはなかった。それはそもそも、人種や民族と誰かの「アイデンティティ」の結びつきを、どのように考えたらいいかさえ「学んでいなかった」からだと思懐している。確かに、編集長の任にあった期間、『ニュー・レフト・レビュー』誌上でホールが、後にするのように「植民地少年」としての自らの自伝的なエピソードを交えながら、人種差別や人種についてはきりと書いたことはなかった。だから、このデイヴィスの述懐を無知として非難するのはフェアではないだろう。しかしこのカジュアルな告白は、極めて徴候的な出来事ではないだろうか。つまり、一九六〇年

代にイギリスを舞台に英語で批判的な政治論評を書き続ける知識人は、おそらく一〇〇パーセント白人だろうという仮説、思い込み、常識化された知識があったということだ。同時に、かつての大英帝国をはじめ、世界の植民地が次々と独立していく一九六〇年代前半にあって、そしてアルジェリア、ヴェトナム、ケニアなどで激しい反植民地闘争が繰り広げられていた時代において、イギリスの言論界にはアフリカ系、カリブ系、インド系、中国系などの非白人の知識人の場所があるわけがないという前提があったということだろう。このような前提でイギリスの言論界を見ていたのは、なにもデイヴィスに限ったことではなかったのだろうが、ホールが「良き植民地の臣民」としてローズ奨学金を獲得しオクスフォードにたどり着く二〇年も前に、トリニダード生まれのC・L・R・ジェームズは、旺盛な執筆活動をランカシャーの小さな町ネルソンで開始していたのである。

他方で、デイヴィスが目にしたホールの言葉遣いや筆致が、あまりにも「イギリス的」だったという言い方もできるかもしれない。キングストンの学校で読んだディケンズやサッカレーの描き出すロンドンやイングランドの風景を、まるで自分の国であるかのように疑似記憶していたホール少年ほど、被植民者による植民者の「擬態」を見事に表している事例はない。ホールははっきりと言い切っている。自分はイギリスに来てから「西インド人だということを見つけた」のだと。ホールの置かれたこのような立場性において、人種は「アイデンティティ」を構成する一属性としての「変数」的要素を超えて、彼の言論人としての、「パブリック・インテレクチュアル」としての、存在そのものに関わる重要な争点となっている。白人ではないどころか、当時はイギリス人ですらなかったホールが、イギリスの階級政治や冷戦下における社会主義について、「私たち」という主語を用いて読者に語りかける。そして、これは重要なことなのだ、ホールはそれをわざとやっていた。当然、「私たち」と呼びかけられた雑誌の読者、集会や勉強会

の参加者、ラジオのリスナーは、そう呼びかける人間が「イギリス人」であり、「社会主義者」であり、「左翼」であり、なにより「白人」である「私たち」と同じ「アイデンティティ」を持っているのだと「誤解」しただろう。ホール自身が人種を語るときに頻繁に用いていた表現を借りるなら、「浮遊する記号表現」としての人種を、まさにホール自身が体現していたことになる。イギリス人であることが白人性に完全にハイジャックされている歴史的状况を逆手に取って、肌の色、植民地システムにおける主客関係、国民としての資格付けの間には必然的照応関係などまったくなくないということを、リアルに演じていたのである。

とすれば、ホールが白人イギリス人だと思いこんでいた人々は、見事に騙されたわけである。騙されたと同時に、人種はまさに「浮遊する記号表現」として、様々な歴史的状况のもとで、様々な他の人間のカテゴリーが分類し機能する「様態」となっていることを証明してしまったと考えることもできるだろう。黒人であることにはなんの保証もないし、同時に白人であることにもなんの保証もない。黒人であるからといって、奴隷制の記憶をすべて引き受けて生きなければいけないわけでもなければ、同情され、共感され、支援されるべきか弱き存在であるわけでもない。一九六〇年代後半以降、多くの物理的・精神的犠牲を払いながら、「黒いことは美しい、(Black is beautiful)」し、「黒人であることにプライドを持つ」ことさえ、可能になった。その結果、アメリカではバラク・オバマというアフリカ系大統領の誕生を見た。それは、白人と黒人の人種関係から見れば「いいこと」かもしれない。しかし視点を変えて日米関係の文脈で、アメリカ人と非白人としての日本、さらには日本の内部でのヤマトンチュとウチナンチュとの人種的民族的関係の文脈で彼がしたことを顧みれば、沖繩への基地負担を強化したという負の功績が目立つことになる。このような「保証のなさ」は、ジェンダーに関しても言えることだ。フェミニズムがずっと目指してきた

「男性と対等に」という目標は、世界に続々と女性リーダーが誕生していったことで、少なくとも表面的には実現されてきたように見えるけれども、「多文化主義は失敗だった」と明言して移民への排外主義を再活性化させる余地を作ったのは、そうした女性政治家の代表であるドイツのアンゲラ・メルケル首相だった。

他にもいくつもの事例がある中で、一つ確実に言えるのは、黒人が大統領になり、女性がリーダーになったからといって、世界が多様性を受け入れたとしても、人間の平等性が必ずしも相対的比重を増していくことにはならないという点だ。ホールが亡くなった二〇一四年以降、日本を含めて権威主義的で国家主義的なポピュリズムが、第二次世界大戦以降いまだかつてない勢いで力を獲得しつつある。人種の言説はそのような潮流の中心に、再び姿を現している。だからこそ、人種を「浮遊する記号表現」として考え、その重要性とともに、その「保証のなさ」も視野に入れたホールの思考をここで再び読み直し、現代という重層的情况の中で解釈し直す必要があるのではないか。

2. 「権威主義的ポピュリズム」と人種差別

人種差別は「権威主義的ポピュリズム」の根幹をなす原理だった。「権威主義的ポピュリズム」とは、移民労働者の居場所を、イギリス国内の「内なる敵」という立場に最適化することで白人労働者階級や相対的貧困層に訴え、一二年にわたる長期政権を敷いたマーガレット・サッチャーがどのように支持を動員できたのかを説明する際にホールが用いたアイデアである。前述のメルケルや、現イギリス首相のテレ

ザ・メイらの先駆者とも言えるサッチャーの政策哲学を「サッチャリズム」と名付けたホールは、それがどこからともなく急に現れて力を獲得した、保守政治の突然変異だとは決して考えなかった。サッチャーの台頭に道を開き、とりもなおさずそのポピュラーな人気を準備してしまったのは、一九七〇年代の労働党政権下における「左翼の失敗」だったと指摘したのである。それは、労働党の政治家、公式・非公式のブレインの知識人、草の根の活動家たちが、ポピュラーなものの政治的重要性を訴えることを怠っていたという指摘だった。この「失敗」は、サッチャーと彼女のブレインたちが、伝統的な保守党基盤である貴族や大地主、巨大資本家に眉をひそめられてもそれに屈せず、積極的な規制緩和によって起業家にチャンスを与えながら、組合の解体や労働者階級の内部分裂を謀り、イギリスの資本主義的社会関係を変えてしまおうとした一方で、労働党は旧態依然とした階級政治や、組合をベースにした利益団体政治を政治過程の中枢に置く思考を変えられなかったことにとどまらない。サッチャー以前の歴史的状況におけるさらに重要な「失敗」が、イギリスの戦後政治が世界的な新自由主義の波に波長を合わせる契機を準備していたのである。

それは一九七八年に初版が出版され、その後、現在に至るまでカルチュラル・スタディーズにおける最も批判的で重厚な研究として評価され続けている共同研究の集大成である、『危機を取り縮まる——路上強盗、国家、法と秩序 (Policing the Crisis: Mugging, the State, and the Law and Order)』によって明らかにされていた。それまでイギリス英語では一般的に使われてこなかった「路上強盗 (mugging)」という言葉や、移民や黒人が関わった犯罪を報道したり検証したりする際に多用し、移民や黒人を「ラベリング」によって「犯罪者化」して都市における人種差別をエスカレートさせていくマス・メディアの言説戦略に呼応するかのように、一九七〇年代を通じてイギリス治安当局とその方向性を後押しした労働党政権は、「法と秩序」の

回復ばかりを判で押したように唱え続けた。「内なる敵」は、すでにサッチャー登場以前に用意されていた。サッチャーは、その存在に「内なる敵」と命名すればよかったのである。『危機を取り締まる』は、このいわば「サッチャリズム」前史を同時代的に実証し、かつ批判した緊張感に満ちた書物である。

サッチャー政権誕生前後や、大方の予想に反して彼女が再選される一九八四年の総選挙前後にホールが旺盛に書き発表した論考は、「サッチャリズム」をイデオロギー闘争の暫定的勝者として定位するものだった。市場原理で社会を再編成することを国策とする「サッチャリズム」においては、社会変動の波に乗れない社会の構成員は自助努力のできない落伍者扱いされ、格差は拡大される。それと知っていながら、なぜ「本来」は支持することなどないだろうと思われていた労働者階級の多くがサッチャーと保守党に票を投じたのか。ホールは、まず労働者階級が労働党や左派勢力を支持するはずだという思い込みが、保証なき政治を見誤り続けてきた落とし穴だと看破した。階級意識によってつながる共同体としての労働者階級とは一体誰だったのか。もしその共同性が、戦後イギリス社会における階級闘争をなんとか成り立たせてきたのだとしても、「サッチャリズム」は「社会などない、あるのは個人と家族のみ」という言説によって、共同性Ⅱ社会そのものを無意味化しようとしていた。「狂信的左翼」というサッチャーが好んで多用したフレーズはあながち誇張ではなく、硬直化した左翼の政治的思考を反面で言い当てていたのである。同時に、この階級の切り崩し工作は、移民を標的とした人種政治を活性化させた。サッチャーは、戦後イギリスの経済復興を支えてきたカリブ、インド、アフリカ、中国からの移民労働者二世や三世に対して、「そしてあなたたちは、どこに帰るんですか？」と脅迫的に問い続けた。まさに人種は「階級が作動する様態」となって、イギリスの各都市は人種の緊張と不安定さが彷徨する「ゴースト・タウン」³と化した。階級政治が人種差別へと転移されることによって、階級横断的なナショナリズムがふつと形成されて

しまった。左右の政治はもともと不均衡で非対称なものだ。それは生産手段が共有もされない状態で築かれる生産関係に似ている。一九七〇年代のフェミニズムは、この非対称性の解消こそがジェンダー政治の目的だと定めたが、イギリスの左翼は非対称性自体に鈍感だった。物理的客観的に労働者階級であることが、なぜ政治的指向性においてネオリベリズムに傾倒してしまうのかを感知する「知的感受性」⁴に乏しくなってしまうのだ。

その隙間に入り込んだのが「権威主義的ポピュリズム」としての「サッチャリズム」だったとホールは説くのだが、この入り込んだ過程、経過、仕組みを説明する際に、ホールはサッチャーの言葉遣い、語彙、レトリックの総体、つまり言説と、その言説を意味あるものとして解釈可能にするイデオロギーを強調した。政治経済学者のボブ・ジェソップは、このようなホールの「サッチャリズム」解釈を「イデオロギー主義」として批判した⁵。簡単に言うならば、言葉にばかりこだわるのではなく、その言葉が表象する客観的現実が重要なのではないか、という主張だ。なぜサッチャーはここまで支持され、反対勢力は支持されないのか。それには客観的な理由があるはずだ。そしてその理由は現実なのだ。だから……、という論理である。言葉はあくまで現実を表象するだけで、代理物であるという発想。これは裏を返せば、所詮言葉だ、言葉で人の意識は変えられない、サッチャーを支持する存在そのものを突き止めて、その存在を変革しなければならぬという、こういう存在はこういう意識を持ち、こういう行為に出るといふ、機械的因果論に裏打ちされた思考である。しかしホールは違った。存在と意識は時に矛盾する。そこに絶対的に保証された照応性はない。労働者階級「だから」、左翼「だから」、ではなく、労働者階級「にもかかわらず」、左翼「にもかかわらず」というねじれこそがキーであり、そのねじれの仕組みを理解するには、言葉を根源的に考えなくてはならない。これが、ポスト構造主義とも、言語論的転回とも、もっと大雑把に

ポストモダンとも言われた思潮に、イギリスの高等教育の研究機関としてはどこよりも早く注目し、それを方法論として取り入れようとしたパーミンガム大学現代文化研究センターでの活動を経たホールが、伝統的な労働党のブレインである知識人たちに返した応答だったのである。

3. 言葉と知的感受性

言葉があった。そして、言葉遣いにとことんこだわった。それが記号と言われようと言説と言われようと、またイデオロギーと言われようと、そこには言葉への強い批判的感受性から生まれる、スチュアート・ホールにしかできない政治への介入の仕方があったのである。論文やエッセイにとどまらない。数多くの講演、集会での演説、テレビのトーク番組への出演、日本の放送大学もモデルにしたオープン・ユニヴァーシティでのテレビ画面を通しての講義。ホールが話すとき、彼は書くときと同じように、機械的因果論で言葉を紡がない。もうそれはどこかで聞いたことがある、以前に話したことがある、という事柄でも、議論したいことにたどり着くまでに必要だと判断すれば、何度でも多用して、再確認しながら話を進めた。ホールが特定のテーマで話をするならば当然もう知っているであろうと思われる語彙や概念でも、一つ一つ確認しながら、そして時に聴くものを惑わせながら、的確に言葉を紡いでいった。そうした姿勢そのものが、ホールが「理論化」と呼んできた作業にも直接つながっているのである。『ニュー・レフト・レビュー』の前身である『ユニヴァーシティ・アンド・レフト・レビュー』時代は、イギリス共産党の若き秀才だったラファエル・サミュエルや、後に社会史の大家となるエドワード・トムスンに「マルク

ス主義解釈の厳格さの欠如」を批判され、「権威主義的ポピュリズム」をめぐる論争においては、ジェンツプらからそのイデオロギー主義を批判され、一九九〇年代に入って積極的に黒人ディアスポラ論を展開した際に「黒人文化の「黒」とはそもそもなんのことだ？」と疑問を呈した途端、特にアメリカ合衆国のアフリカ系知識人から、かつてのブラック・ナショナリストを彷彿とさせるような厳しい批判にさらされた。

論争的であることを避けず、むしろ論争の場所を拓くようなその知性の身振りは、文芸批評家テリー・イーグルトンから「ヒップスター」と揶揄された。こうした、いわば左翼の身内から突きつけられてきた批判や非難について、なんでいつもそうだったのか、ホール自身がその理由をはっきり自覚的に説明している。

私は、私たちの世代がマルクス主義に向き合ったときそうであったような、あらゆることを内に抱え込める全体性としての確実さを求めるものとして、理論というものを考えることを止めてしまった。そうではなく、すでに私たちが気づいているように、あらゆる歴史過程や説明における偶発性の力と、いうものを認める必要があるからだ。言い換えるなら、決まった場所にはいられないということの力学が、あらゆる社会関係を規定していると認めなくてはならないということである。

このような「知的感受性」をもって、ホールは「サッチャリズム」をはじめ、彼が批判する対象に対峙した。知識人、言論人として活動を始めたオクスフォードでの学生時代から「ヒップ」であることに半ば自覚的だった「植民地少年」の言葉への感受性と想像力は、ずっと後年になっても失われることはなかった。

その態度が最も鮮明に現れたのは、「制度的」人種差別を処方箋的なリベリズムで解決しようとするこの不備を的確に指摘した一九九九年に発表されたエッセイ、「スカーマンからステイヴン・ローレンスへ」におけるホルルの警句である。このエッセイは、一九九三年に一人のカリブ系の少年が五人の白人の若者によって命を絶たれた出来事の、公的な落とし前に対する鋭い批判的回答だった。「ステイヴン・ローレンス事件」として知られるこの出来事は、被害者が一〇代の黒人少年であり、加害者が複数で、確実に人種差別的動機による凶行であったにもかかわらず、警察の捜査、加害者の起訴、結審にいたるまで一五年以上の歳月を要した。その過程を検証するために政府の委託を受けたウィリアム・マクファーン判事を主幹とした報告書の中で明らかにしたのは、警察の初動の遅れと捜査の杜撰さが「制度的で組織的」な人種差別に基づくものだということだった。この報告に対して、一方の当事者であるロンドン首都警察長官ポール・コンドン卿は、組織内で「無自覚の、無意識の、意図せざる」人種差別があったことを認めた。ホルルが目を光らせたのは、ここである。

問題は始めから、「自覚的で、意識的で、意図的な」、いわば顕在的な人種差別ではなかった。侮蔑的な言葉を吐きながら暴力を振るったり、明らかに差別的な行為を平然と行うことと、「制度的で組織的」人種差別が大きく異なるのは、後者が日常生活におけるルーティンや職務（ここでは警察官の）を遂行することと全く矛盾せず、慣習行為や世界との「常識的な」つながりの中で日々実践されているが故に、指摘すること自体が難しい条件や環境にあるという点である。警察の職務で言うならば、特定の人種には特定の扱い方に対応するというルーティンが、組織内で、上司から部下へ、先輩から後輩へ、「常識」として受け継がれているということである。一九八一年にロンドン南部ブリクストンで起きた「暴動」は、アフリカ系、カリブ系の住民の間で警察による執拗な令状なき捜査への不満が鬱積していた中で、ナイフ傷を負

った黒人青年マイケル・ベイリーが助けを求めたにもかかわらず、「どうせ黒人のチンピラ同士の喧嘩だろう」という「偏見」に支配されたブリクストン署の警官が放っておいて、彼を死に至らしめたことがきっかけの一つではなかったか。そういうことは、起きるのだ。ホルル曰く、「家に帰ればレゲエを愛聴し、毎週土曜日にはカレーを食べ、友人のなかには黒人も何人かいて、「良い警察官」になるために頑張っている若者が、夜間に大きな紙袋を持って一人バス停に立っている黒人を見たとき、十中八九、泥棒だろうという予見」に基づいて「きちんとした取締り」をしようとする、そういう「文化」が「制度的で組織的」人種差別なのである。それは警察の職務に対しては「自覚的」で、意識も高く意図的な態度であり、行動だろう。しかし同時に、「無自覚で、無意識で、意図せざる」人種差別に与していることになる。ホルルが強調するのは、人種差別は個人の心理からではなく、その個人が置かれた社会過程から生起するという当たり前の事実である。

二〇一四年二月、マス・メディアは、「多文化主義のゴッドファーザー」という見出しを掲げ、メルケル首相やイギリス首相デイヴィッド・キャメロン（当時）による「多文化主義の失敗」という公言を受けて、いくらかは皮肉めいたトーンでホルルの死を報じた。EU諸国への移民受け入れはもちろん、警察やその他の公的機関における多様な出自の職員の雇用を促進したり、教育や啓発活動によって「人権」や「寛容」を説くことを、ホルルは否定しないだろう。だがそうした「多文化主義」の政策的汎用（「コスモティック多文化主義」）が、個人の良心や理性、知識の有無、倫理感に頼り切ることで約束履行を果たさうとするなら、そこにはネオリベリズムの市場原理と親和性が高い「多文化」ばかりが生き残るといった限界があるだけではなく、社会組織や制度の奥底に深く根付いている人種的思考には手がつかないままであることを、ホルルは繰り返し警告してきた。

4. 「真実を語れ、そのまっただき複雑性において」

メディアへの出演を含む様々な現場で批判、提言、コメントを継続的に発表してきたホールは、「パブリック・インテレクチュアル」と形容されることがある。ホールはエドワード・サイードを念頭に置きつつ、大学という研究教育機関や言論界に発言の場を限定せず、自分が置かれている環境や条件からできるだけ距離を取って、しかし同時に状況拘束性に自覚的でありながら、いくら不都合であっても「真実を語る」存在として、知識人を捉えている。「真実を語る」。この言い回しは、例えばジェソップとの「権威主義的ポピュリズム」をめぐる論争を思い返し、記号論的なメディア・メッセージの読解から始まり、人種を「浮遊する記号表現」だと定義づけたホールの思考を顧みるとき、少し奇妙に聞こえるかもしれない。真実の有無ではなく、なにがどのように真実として語られているのか、それが真実として優先的な意味を付与されているのどのようにか、真実とそうではないものとの意味作用をめぐる折衝こそが大事ではなかったのかと、「エンコーディング／デコーディング」以降のホールの読者ならば、思うかもしれない。

だから、急いで付け加えなくてはならない。ホールが実際文字にしている言葉はこうである——「真実を語れ、そのまっただき複雑性において」¹⁰。真実とは、いかに複雑さに満ちているか、真実にたどり着くことも、それを他者に語ることも、どれだけ複雑な作業であることか、そのことも同時に語れと言っているのである。この発言は、二〇〇四年にキングストンの西インド大学にてホールの生涯と思考を回顧することを目的として開催された学術会議における、「知識人生活というプリズムを通して」と題された閉会の

辞でのものである。ホールの仕事について多数の発表者が集ったこの会議の最後までまな板の上に乗せられ続けたその本人は、その多数の発表者が次々と口にする多様な概念や語彙、フレーズ、定型句、ジャゴンを受け流して、とてもシンプルに聞こえるアイデアを聴衆に披露したのである。

SNSがメイン・メディアと化した現代世界で「真実を語れ」などと口にすれば、それは即「フェイク・ニュース」がニュース価値を持ってしまっている現代への批判と受け取られるかもしれないが、このホールの主張は少し違う。虚偽や、誇張や、センセーショナルリズムを対極に置いた発言ではないからだ。むしろ、真実か虚偽かはもはや問題ではないという「ポスト真実」的世界における、意味の屈折、多方向性、融合と分裂を、言葉が生産され、交換され、読み取られる現場に分け入って見定めよというメッセージとして学び取るべきではないだろうか。それは同時に、言葉の限界域——それ以上踏み込めないぎりぎりの地点——まで言葉を追い込め、ということでもあるだろう。マルクス、レーニン、フロイト、ヘンリー・ジェイムズ、C・L・R・ジェームズ、グラムシ、バルト、ルカーチ、アルチュセール、デリダ、フーコー……。多様な思想の多様な言葉群を貪欲に読み取り、読み替え、時には屈折させてアウトプットしてきたホールの知識生産それ自体が、それを読み直すことを通じて現代の危機を理解し、それに対応し、生き抜くための、一つのプリズムなのである。

そんなプリズムから放たれてきた種々多様な光線を見定め、時にはそれに幻惑させられ、また時には導かれながら考えたことの記録が本書である。新たに書き下ろした序章は、現在日本で、日本語で、スチュアート・ホールの思考を再びたどり直すことの意義について論じた、本書全体の露払いに当たる文章である。以下、既出の論考を適宜最低限の加筆修正にとどめたまま三部構成で収録した。第一部は、スチュアート・ホールの生涯についてと同時に、筆者とホールとの遭遇と交差についてのレジュメとして読んでい

ただければよいだろう。第二部には、ホールが「レスリング」と呼んだ現代思想や理論との格闘の過程から生まれたカルチュラル・スタディーズの展開とエッセンスについての、総論的な考察が収められている。第三部は、第二部を受けて、階級、人種、文化という概念／現象そのものを対象にした各論的論考を収めた。終章は、ホールとニュー・レフト、マルクス主義、フェミニズム、ポストコロニアリズム、ディアスポラ論、そして社会主義的な政治の現実との折衝と分節化を再検証しながら、ポストE.U離脱 (Brexit) のイギリスを中心とした状況を理解するために、ホールの思考にはいまだに重要な妥当性があることを明らかにする試みである。

政治、経済、社会の多様な、そして現在進行形の諸問題を文化的に、「文化」という視座を設定して批判的に理解しようというカルチュラル・スタディーズの身構えを、ホールとの対峙の仕方を本書の読者とともに振り返ることで少しでも見定めることができるなら、ステュアート・ホールという知性の軌跡をあぶり出すという本書の目的は達成されるだろう。

- ▼ 1 Angela Davis, "Policing the Crisis Today", in Julian Henrique and David Morley eds., *Stuart Hall: Conversations, Projects and Legacies*, Goldsmiths Press, 2017, p. 258.
- ▼ 2 ステュアート・ホール+陳光興「あるディアスポラの知識人の形成」小笠原博毅訳、『思想』第八五九号、一九九六年一月。
- ▼ 3 「ゴースト・タウン」は一九八一年にリリースされたイギリスの「ツートーン」スカ・バンド、スペシャルズのシングル曲のタイトル。頻発する都市暴動と社会不安について歌われている。

- ▼ 4 Stuart Hall with Bill Schwartz, *Familiar Stranger: A Life Between Two Islands*, Duke University Press, 2017, p. 237.
- ▼ 5 「権威主義的ポピュリズム」をめぐるジェンソップとの論争について本書第五章参照。
- ▼ 6 Hall with Schwartz, op. cit., p. 76.
- ▼ 7 Stuart Hall, "From Seaman to Stephen Lawrence", *History Workshop Journal* 48 (1999).
- ▼ 8 *Ibid.*, p. 195.
- ▼ 9 Stuart Hall, "Epilogue: Through the Prism of an Intellectual Life", in Brain Meeks ed., *Culture, Politics, Race and Diaspora: Thought of Stuart Hall*, Ian Randle, 2007, p. 289.
- ▼ 10 *Ibid.*



I

パブリック・
インテレクチュアル
の肖像